

いちごの沈黙

鈴江俊郎

谷垣めぐみ 三十一歳
岡 ちか 三十一歳
加藤達哉 三十一歳

男一人、女三人がたたみの部屋に座っている。
座卓。お茶のセット。
男はセーターにズボン。
女ひとり（谷垣）は旅館備え付けの浴衣、ハンテンを羽織っている。
別の女（岡）はセーターにスカート。
三人ともなにか疲れているのか。

岡 浴槽って言わないよねあれは。
加藤 うん。
岡 風呂桶。
加藤 うん。
岡 でしょ。
谷垣 湯船。
岡 そんないいもんか。
谷垣 いやお湯はいい按配だったよ？
岡 よく入るね。あんな腐りそうな木の風呂桶に。
谷垣 私は風呂桶に入るんじゃないから。お湯に入るんだから。
岡 あんたはご飯食べるって言ったらほんと文字通り白い米だけ食べる女だもんね。
加藤 えそうなの。
岡 そうだよ。知らなかった？
谷垣 なに。悪いの。
岡 ご飯食べる？なにもないんだけど、って出してくるの、ほんと白い米だけ。
加藤 食べられるもんかな。それだけを。
岡 むしゃむしゃむしゃむしゃ、口に入れるのは白い米、白い米、白い米、白い米。
谷垣 昔のお百姓さんはね。食べられなかったんだからね。粟やひえしか口に入れられずに年老いていく吾作は十三人の子だくさん。
岡 じゃ江戸時代に行け。
谷垣 マントをくれ。タイムマシンのマントをくれ。

岡 ドラえもんか。
谷垣 ドラえもん！
岡 なにを！
加藤 ちよつとよくわからない言い争いはやめて。
岡 たにがーは白い米だったら風呂桶によそってもらっても食べるでしょ。
谷垣 風呂桶お膳の上に乗せてくれるらだしたら食べます。
岡 ああだったら風呂桶いっぱい白い米盛りあげてあげようじゃないの。
谷垣 風呂桶いっぱいお米炊いてくれ。巨大炊飯器出してくれ。おなかのポケット使ってくれ。
岡 ドラえもん！
谷垣 ドラえもんはおまえだろう！
加藤 だからもうそれ悪口？
岡 男風呂はどうだったの。やつぱり腐りかけ？
加藤 腐りかけ、ってわけじゃないけど。
谷垣 うん。どう？
加藤 味のある浴槽だったよ。
岡 味って。
加藤 ところどころ「コケかな、これ」って緑色の。ぬるぬる。
岡 ぬるぬる。
加藤 あれは違うのかな。カビかな。
岡・谷垣 ぬるぬる。
岡 なにあんた。いいお湯だったんでしょ。
谷垣 でもせっかく遠いところまで来たのに。入らないと損じゃん。
加藤 そんな問題かな。
谷垣 あんな浴槽に入れて言う宿なんてないよ？きつと日本中探しても三十二軒くらいしかないよ。
岡 三十二軒って結構多いじゃん。
谷垣 少ないさ。日本中でだよ？
岡 少ないのかな。だいたい宿って言うのは日本中で何軒あるの？

谷垣 さあ。何軒かな。電車の駅ひとつにつき平均十軒くらいあるとして、
岡 ええ。十軒は多いよ。
谷垣 多くないよ。平均だよ？
岡 多い。
谷垣 少ない。
岡 ドラえもん！
谷垣 ドラえもんはそっちじゃ！
加藤 だからさ。
谷垣 落ち着きなさいよ。いい大人が。
岡 おまえじゃ。
谷垣 せっかく社長がプレゼントしてくれたんだし。楽しんでないと。
岡 違うじゃん。話が。緑豊かな自然の中に素朴な味わいのランプの宿。
谷垣 ランプしかないよね。
岡 電気が通ってないだけじゃん。ここ。こんなところ？いまどき。電気通せよ。電気。ああ。びりびりしたい。私は今とつてもびりびりしたい。
加藤 まあでもランプはあるし。
谷垣 だね。サービスかな。二つ出してくれたね。
加藤 緑の中ではあるし。
谷垣 うん。名も知らぬ雑草がほら窓のそこにも。
加藤 自然だよ。この建物。こっち側なんて床下、土じやないよ。崖だよ。
谷垣 うん。大丈夫？って感じのつつかい棒が支えてるんだよね。そっち側はね。
加藤 素朴だよ。自然の香りがたつぷり。
谷垣 窓閉めてるのにどこからともなく虫がいつぱい入ってくるもんね。
岡 自然を楽しむ旅じゃないじゃん。自然に負けそうないだけの旅じゃんこれ。
谷垣 いやあ。圧倒的な大自然を味わう私はアジアの歌姫。

岡 これご褒美って言えるか？コンクールの上位三店舗の店長へのご褒美旅行がこれ？
加藤 いやでもどうせご褒美っていつてもさ。
谷垣 ねえ。
加藤 行きたくもないデイズニールランドにいい大人三人で出かけてもさ。
谷垣 行きたくもない冬の寒い韓国でどんなに辛いキムチ食べてもさ。
加藤 辛いしき。寒いしき。
谷垣 行きたくもない信州のスキー宿っていつてもさ。夜行バスじゃさ。
加藤 眠れないしね。酔うしね。
谷垣 おかちかは期待してたの？
岡 期待なんかしてないけど。
谷垣 何回目さ。もう知ってるでしょ。銀メダルのおかちかさん。去年は銅メダルのおかちかさん。
岡 うるさいな今年銅メダルの谷垣さん。でもいくらなんでもこれはないでしょ？私ご褒美旅行来るのこれで三回目だけ。こんなはないよ。初めてだよ。
谷垣 私二回目。
加藤 僕四回目。金メダルです。
谷垣 拍手う。(拍手)
加藤 いやいやいや。(てるる)
岡 もう。また虫！
加藤 うそ。(逃げる)
岡 ああ。
加藤 手でつかむなよ。女の子でしょ岡さん。
岡 べっぺっぺ！
加藤 なにがべっぺっぺ。
谷垣 これはあれだよ。社長はさ、なんか見出しだけで決めたんだよねこれ。
加藤 見出し。
谷垣 安い旅行雑誌さ。ランプの宿 ほおー？これはさぞ社員も励みになるじゃろうておっほっほ。」

岡 だれよそれ。
加藤 社長でしょ。
岡 社長はそんな乳お化けじゃないわよ。
谷垣 くやしかったら乳出せ乳。
岡 ここどこ？なに県？だいたいなに県。っていうようなところにちゃんと属してるの？ここは。運転も自分たちで交代だし。運転手くらいつけてくれっちゅうの。
加藤 車は貸してくれたよ。
谷垣 営業車じゃん。普通に業者さん回るのに使う奴じゃん。
岡 ダンプがビュンビュンとばしてく国道、走らせるだけで恐怖だったじゃん。
加藤 国道ってすごいね。都会からこんなところまで一本道でやっばりつないじゃうんだね。
谷垣 この道の果てがきちんと都会だったことが脅威だね。
加藤 勉強になったな僕は。
岡 川風呂つて言うからどんな清流かと思ったら着いたらもう暗いし。ダクダクすごい音で流れてるし。宿から遠いし。足元くらい道を延々。
加藤 七、八分かな。
谷垣 湯冷めしちゃったな。ちよつとね。
岡 トイレがいやだ。
加藤 山の中だからしかたないよ。
谷垣 水洗を期待しちやいかんよ。
岡 遠いじゃん。なに。どっぼんでもいいから、汲み取り式でいいから、近くにしてよ。どうしてあんな廊下の遠い先にあるの？
加藤 でも近くにあったら匂うよ。
岡 宿の人のことどう思う？
谷垣 うん。
加藤 確かに愛想がいいとは言えないよね。
谷垣 学校が遠いんだよ。
岡 それ愛想の悪さに関係するの？

谷垣 するよ。子供が疲れて帰ってくる。食卓が暗い。
加藤 疲れて帰ってきた子供はごはんがおいしいんじゃないかな。
谷垣 学校が遠いから靴が減る。「靴買っておくれよ、お
かあちゃん。」「雑巾でつぎあてしてといてやつから辛抱
せろやわらしつこ。」「やんだやんだ。新しい靴がええ
だ。」「辛抱のないわらしつこは山からドロタバウが下
りてきて食らってしまうんだじえ。」「ドロタバウ、や
んだあ。あーん。」
岡 ああもう脳みそ腐る。
加藤 暗い食卓だねえそれは、きやあ。(飛びのく)
岡 ふん!
谷垣 うわ。また手づかみ。
岡 (暗い廊下に出て) ふん! (と投げ捨てる)
加藤 きやあ。きやあ。
岡 ……(戻ってきて) かえてもらおうよ。宿。
谷垣 どうやって。
岡 電話して。
加藤 携帯、圏外です。
岡 じゃ宿の電話借りて。
谷垣 宿のご主人の目の前で言うの?
岡 言う。
谷垣 「せっかくわしが予約してやったのになんだ!お
まえの話は、つまらん!」
岡 だから誰だつて。
谷垣 乳お化けです。
加藤 あとから社長にゴチャゴチャ説明しないといけな
くなるよ。もう。いいじゃん。
岡 ああ。もう……
岡、コップに酒を注ぐ。
谷垣 男のくせになにがきやあさ。
加藤 苦手なんですう。

岡 みたことないような虫がいるね。
谷垣 さつき大きなムカデがいたよ。これくらい。(三十
センチ)
加藤 うそん。
岡 ランプから離れなさいってだからできるだけ。
加藤 暗いと怖いし。
谷垣 怖いって、寝るのは一人だからね。
加藤 無理。
岡 無理ってなに。
加藤 無理だよ。隣の三畳で?一人で?寝ろつて?
岡 男女一緒に寝るの?
加藤 いや、そんな原理原則をふり回すなよこの非常事
態に。
岡 有事か今は。戦争状態か。
加藤 ムリムリ。絶対無理。どんな虫が顔の上這うかわ
からないんだよ?一人じゃ怖くて眠れません。
谷垣 どっちの女抱いたらいいかわかんないしね。
加藤 へ?
岡 ほんとだね。今年は揃っちゃったんだもんね。大変
だね。
加藤 へ?
岡。 間。 くらいとコップ酒をのみほした岡。
加藤 またまた、もう……
谷垣 またまたもうじゃないでしょ。鉢合わせになるな
困るな、つて思わなかったの?
加藤 そこまでは。
谷垣 バカじゃない?
岡 そこまで考えるような奴がさ、こんなことしません
つて。
加藤 はい。
岡 〆褒美旅行で女に手つけて。
加藤 はい。

岡 四年続けて出て出して。それなに?年に一度の旅でし
か会わない女は気楽で使い捨てですか?
加藤 そんなことは決して。
岡 女の方は心待ちにしてるとか思ってた?この旅で、
加藤君に出会うために、そのためにコンクールを頑張
ってるはずだ、とか思ってた?
加藤 いえ。
岡 あの人に会いたい。全国大会の一週間頑張るんだ。
ハンバーガー屋だって馬鹿にするな。愛をかけてるん
だ。接客態度、料理のスピード、店の清潔感、ハンバ
ーガーのパンはふくらみすぎてもふくらみ足りなく
ても減点だ、上位三人に入るんだ!だってあの人に会
えるんだもん!
谷垣 私そうだよ。
岡 え。うそ。
谷垣 おかちかは違うの。私はそうだったよ。
岡 え。ほんと。
谷垣 ごめんね。認めちゃう。会えてうれいんだよ。
たっちゃん。
岡 たっちゃんつてなに。
谷垣 もういいもんねたっちゃん。だって私たちたっち
やんめぐちゃんの仲だもん。
谷垣が加藤の腕にしがみつく。
加藤 うわちよつと。
谷垣 なによ、たっちゃん、いいじゃん、たっちゃん、
見せつけちゃおうよたっちゃん。
加藤と谷垣、揉み合う。岡立ち上がる。
二対一の凶。鋭く走る緊張。長い間。
岡 なによあんた。
谷垣 なんですか。

岡 だからどこまでこうなのよ。
谷垣 どこまでつてどこですか。
岡 いいかげんにしようよたにがー。たにがーたにがー
たにがー！
谷垣 おかちかおかちかおかちかおかちか！
岡 どこまで張り合ったら気が済むの。あなたはなに？
私のなに？どうしてあなたは私のあとばかりくっつ
いてはりあって、むきになって、取り合いっこして。
谷垣 ライバル。
岡 え。
谷垣 だつてライバルだもん。
岡 だから。
谷垣 まあ単純に言うしそいうことだよね。
岡 いいかげんにしようよ、長いよ。
谷垣 長いね、もう何年くらいかね。
岡 大学に入った時からじゃん。
谷垣 ああ、同じ大学入ったのが運悪かったんだよね。
岡 同じ英文科で同じゼミで、
岡 ニューヨークニュー YORK！
谷垣 はい？
岡 私は忘れられないのさニュー YORK ニュー YORK！
(怒っている)
谷垣 ああ、はいあい。私だつて忘れられませんよニ
ュー YORK ニュー YORK。(嬉しい)
岡 忘れたい！
谷垣 忘れたら。
岡 忘れさせて。
谷垣 私にできることなら。
岡 なんだよあれ。羽根つけて、巨大カラスみたいにな
つて乳半分放り出して、英語の時間だよ。
谷垣 半分じゃないもん七割だね。寄せて上げてまわし
こんで大変よ。背中から血が出るかと思つたよ。
加藤 ちよつと、あの。
岡 なによ。

加藤 さつきからなんの話を、その。
岡 あんた関係ないでしょ。
谷垣 英語の授業でね、歌いましてつてのがあつたわけ
よ。
岡 説明すんな！
谷垣 いいじゃん一人だけおいてけぼりじゃかわいそう
でしょ。
加藤 英語の歌ですか。
谷垣 好きなのを一曲覚えて皆の前で歌つてくださいつ
て一人ずつ順番にね。
加藤 うたつて英語の力つくもんね。
谷垣 皆はさ、簡単な歌できこーに歌つてただけだね。
岡 私の番になつてちよつと渋い歌うたつたのよ。皆感
動しちゃつて。それでやきもち焼いたたにがーが頑張
つた、つて話。
加藤 渋い歌つて。
谷垣 ドナドナ。
加藤 子牛と別れてさみしいよつて歌ですか？
岡 ドナドナドナ(歌う)
加藤 それ渋いかな。
谷垣 対抗して歌つたのがニュー YORK ニュー YORK。
岡 東武東上線だつちゅうの。準急もとまらんつちゅう
の。摩天楼なんかどこにあるんだつちゅうの。駅の建
物だつてかるうじて二階建てだつちゅうの。びっくり
したのよ。必要のないに衣装着て。髪の毛こてこて油
でこてこて。目の上青くてほつぺた赤くて目の下さら
きら。
加藤 気合の入つたドラマちゃん？
谷垣 スターだった私。
岡 笑われただけだつて。
谷垣 ニュー YORK ニュー YORK (く) (とうたう)
岡 どうしていちいちはりあうの！シャンソン喫茶を経
営したいのは私。生バンドをつけてライブをやりたい
のは私。自分も歌いたくてライブをしなくてだからそ

ういうお店を持ちたくてだからお金をためたいと思
つてだから学生時代からファーストフードのお店で
働いてたのは私。いつの間にか社員になつてお金貯
めてて、必死になつてるのは私。
加藤 えちよつとそれはなに。どういうこと？
岡 私なのよ！
谷垣 いつの間にかね。はりあつちやうんだよ。
加藤 ライバルだからですか。
岡 私が寝た男だからつてあなたも寝るの。私が上にな
つたらあなたも上になるの。私が後ろになつたらあな
たも後ろになるし私が松葉くずしたらあなたも松葉
くずすし、私が駅弁売つたりしたらあなたも駅弁売つ
たりするの。
加藤 ちよつとまつて。ぼくはそんな。
岡 なによ。
加藤 ……覚えがありません。
谷垣 キー(と加藤をひっかく)
加藤 だから覚えがないんだつて。
岡 私が好きになるからあなたもほしくなるだけのこと
でしょ。私が譲つてあげるつて言つたらあなたは捨
たくなるんではよ。ポイでしょ。グシヤグシヤでしょ。
ポー(燃える音)、でしょ。フワフワ、でしょ。フツ
フツ(息で飛ばしてしまふ音)でしょ。
加藤 うそ。
間
加藤 うそやめてくださいよ。
谷垣 がもう一回加藤の腕にしがみつく。
谷垣 でもだからそういうことになるのがくやしいくて
一層燃えるくせに。
加藤 えそうなの。

谷垣 私に簡単に捨てられてしまうかと思つたら悔しくて眠れなくなるくせに。

岡 そんなことないわよ。

谷垣 捨てるよ。捨てるよ。いいの？ほれほれ捨てちゃうよ？

岡 いいわよ。勝手に捨てなさいよ。

谷垣 ほおそうですか。はあそうですか。ふっふっふっ。

ぼー、ふわふわー、

加藤 ちよつとくすぐったいくすぐったいですよ。

岡が無言で谷垣と加藤の間に入り引き離そうとする。

谷垣、抵抗する。激しい二人の格闘。

岡 うー！

谷垣 いー！

あきらめる岡。廊下の方に去つてこちらに背中を向ける。

谷垣 おかちかにはわたさないんだから。

岡 いいよもう。

谷垣 うん。

岡 なにやつてるんだよ。もう。私たち。

谷垣 うん。

問。

加藤 ああ(ため息)

問。

加藤 もう死にたい。

谷垣 えなに。

加藤 もう僕死にたいんだよ。

谷垣 なにそれ。

加藤 楽しいことが全然なくてさ。

谷垣 うそ。こんなにもてもてじゃん。

加藤 もめてるだけでしょ。

谷垣 コンクール金メダルじゃない。二年連続、みんなのヒーローじゃない。

加藤 一等賞とつたからつて月給が一万円上がるだけじゃん。しかも一年間だけ。なんのために必死になつてるんだかわけわからんよ。

岡 なんのために必死になつてるの。

加藤 基本給安いからでしょ。月給上がつてうちの妻喜んで夫婦二人だけの時間を持つて言うんだよ。

谷垣 いいじゃん。お幸せじゃん。

加藤 基本給安いと普通それ生活費に組み込むよね。で毎年金メダルを強要するよね。でもうちの妻はしない。生活は苦しいのに。俺の労働に敬意を払つてくれるわけだよ。

岡 いいじゃん。毎日楽しいじゃん。

加藤 頑張らないわけにはいかないでしょ。二百五十二店舗の中で一等賞とるなんてきついのに！

谷垣 だったら頑張らなかつたらいいじゃん。妻は「絶対勝つて」とか言わないでしょ。

加藤 そのやさしさを知らしたら裏切れない。

岡・谷垣 ますます美しいご夫婦だ。

加藤 仕事が忙しくて遊んであげられない悪いお父さんなのに子供はすくすくついてくれる。

岡 かわいいんだね。家に帰るの楽しみだね。

加藤 妻は子供生まれてから丸くなった。こんなに優しい娘さんだったのかって驚く。

谷垣 普通逆だよ。女は母になると鬼と化すんだよ。

加藤 こんなにいいことばっかりなのに楽しくならないつてどうしたらいいんだよ！(頭を抱えて小さくなつて横たわる)

岡 わからんこともないけど。

加藤 なんだろう。就職が決まつて、やつと小さい自分のお城を作るね、つて彼女と二人でろうそくパーティーやったあの夜から、なんだかだめになった。

谷垣 どうして？

加藤 小さい自分のお城が暖かくてもさ。それだけのことだつて思えるからかな。

谷垣 いいじゃん。暖かいんだつたら。

加藤 それだけのことだよ。そんなもので終わりまでよく見渡せる人生なんだよ。きつと波乱万丈もなくて穏やかに妻と二人で老後を迎えるんだよ。小さい。小さい。こんなに小さい。

岡 複雑だねえ。

加藤 うちの店バイトの女の子が美人ぞろいなんだよね。谷垣 えまだあるの。

加藤 気立てもいい子ぞろいなんだよね。

岡 ほんとにきりがいいね。

加藤 接客態度とか注意するでしょ。マニュアル細かいからさうちのチェーン。普通「うげえんだよこのオヤジ」てなものでしょ。

岡 私なんか時々ちっちゃい音で舌打ちされる。

谷垣 私聞こえるように舌打ちされる。

岡 「しばくぞおははん」つて言われたこともある。

谷垣 「殺すぞばあ」つて言われた。

岡 はりあうなつて。

谷垣 はりあつてないつて。事実だもん。

岡 うそつけ。

谷垣 うそじゃないつて。

岡 ドラえもん！

谷垣 ドラえもんはおまえじゃ！

加藤 うちのバイトの横井香里さんはさ。

岡 ありやいきなりフルネームですか。

加藤 舌出すんだよ。

岡 舌つて？

加藤 赤い舌をき。ペロって出すんだよ。エへって言うんだよ。自分で小さいこぶしをつくってき。自分の頭のとっぺんをこつんつてこぶくんだよ。だめだぞかおり、つて。ニコってするんだよ。

谷垣 え。そんなのいるかあ？

岡 「だべだぞかぼり」(馬鹿にして低い声で)

加藤 かわいいんだよ。

谷垣 それ店長の前だから作ってるんだって。

岡 そうだそつだ。

加藤 皆素直でさ。働きの者でさ。

谷垣・岡 われわれの意見をきけえ。

加藤 しばらく前にさ。テレビのコマーシャルであったでしょ。カウンターの途中でバイトの女の子が男の子の手をこつそり握るやつ。

谷垣 はいはい。

岡 なにそれ。どういうの？

谷垣 あつたじゃん。ハンバーガーショップだよねあれ。かわいい女の子がためらいがちに隣に立ってる男の子の手を握るんだけどお客さんが入ってきたからつてはつて手を離しちゃう。「僕たちは毎日ドキドキ働きたい」とかいうやつだよ。

岡 はいはい。あれは迷惑だよね。

谷垣 どあほな大学生がさ。ああいうことできると思つて、面接受けに来たりするんだよね。

谷垣・岡 あほかつ。

加藤 うちの店はあれあるんだよね。

岡 うそおん。

谷垣 手握るの。カウンターの影で。

加藤 握られるの。僕。

岡 うそ。コンクール金メダルでしょ。

谷垣 忙しいでしょ。

加藤 ちよつとのすきにさ。わからないようにきゅつて握られちゃうんだよね。

岡 その香里が。

谷垣 横井香里い。(低い声でうなる)

加藤 久美ちゃんなんだけどね。それは。

岡 別の子じゃん。

加藤 栗本久美ちゃん。

谷垣 栗本久美い。(うなる)

岡 ラブラブなお店だな。

加藤 ふざけて背中からきゅつて抱きついてくる子もいる。

谷垣 それは誰。

加藤 利根川志保ちゃん。

谷垣 利根川志保お。

岡 もういいつて。

谷垣 ちよつと楽しくなつてきた。

加藤 皆べつびんさんなんだよ。

岡・谷垣 もてもてじゃん。

加藤 と人はいいます。

岡・谷垣 楽しいでしょ？

加藤 てはずなんだけど。

岡・谷垣 てならないの？

加藤 ならないんだよお。

問。

加藤 俺きつと営業のセンスつていうのがあるんだと思う。人をまとめていくリーダーシップつていうのも。わりとファイトが表に出るほうだからいやみやななくて人を励ましてしまう。ほめ上手なのにその上聞き上手だし。

岡 全て事実だからすごいよね。

加藤 なんだかさ！わからなくなつちやつた！

岡 なにが？

加藤 生きてるつてことがさ。普通人がすごく苦労して手に入れたと思うようなことがさ。僕の場合ひとつだけじゃなくて二つも三つもそんなに苦労もしない

のにほら、こんなふうに。

岡 どんな風にな？

加藤 (岡に) 魅力的な若くてきれいな女性が、僕のことを好きだつて言う。

岡 うそらしい。

加藤 (谷垣に) グラマーで気さくな美人が、僕に抱かれないつて言う。

谷垣 やめてしびれちゃう。

加藤 一人でも有頂天なのに僕には二人も宝物が！

岡・谷垣 ひいひい。ほめ上手うー(どうれしさのあまりの悶絶)

加藤 簡単に手に入っちゃうんだよ。ほら。こんなものまでさ。(自分の旅行かばんを引っ張り出してきた。開けてみせる)

岡 え。なにこれ。

加藤 ……お金です。

岡・谷垣 お金だよね。

岡 ていうか札束というほうが正確だよね。

谷垣 子供銀行券だったり。

岡 (見て) 日本銀行券です。

谷垣 二枚目から下は新聞紙だったり。

岡 (見て) 日本銀行券です。

加藤 八千万円あるんだよ。

岡・谷垣 八千万ー。

加藤 社長がくれたの。二年連続だから。こつそり使えつて。

谷垣 こつそり使えつてどういうこと？

岡 そうよ。公表したらゴージャスな賞金じゃん。皆やる気出すじゃん。

加藤 内緒にしろつて。

谷垣 じゃお店の改装資金にせよとか、特別ボーナスだから恩に着て奴隷のようにますます働け、とか。

加藤 好きに使えつて。けどわからないように使えつて。

岡・谷垣 わかんない。

加藤 はあ(ため息)

岡・谷垣 ためいきつくことじやない。

加藤 だって、はあ(ため息)

岡 あ、はい(挙手)

谷垣 なんですか、おかちかさん。(指名)

岡 これってあれだね。

谷垣 あれってなんですかおかちかさん。

岡 これってきつと汚い金だったりするんだよね。

谷垣 え、え、汚い金って、え、え、え

岡 だからそれはつまりさ。政治家の献金がらみで税務上もてあますから処分しておけ、とかさ。社長が使つて税務署のマルサに嗅ぎ付けられたら巨大汚職事件が発覚するとかさ。

谷垣 だからそれはつまりさ。

岡 ……それこそ。

谷垣 好き勝手に使っちゃったりすりやいいわけさ。

問。

岡・谷垣 ひやつほおーい。

岡 いや例えはだよ。例えばのことであつて、必ずそりに違いないというほどのことではないのだよ。

谷垣 ほどのことではないのですか。え。え。え。

加藤 でも社長はね。そう言った。

谷垣 好きに使えと。

加藤 (うなづき) こつそり使えと。

岡・谷垣 ひやつほおーい。(踊りまわる)

加藤 はあ(ため息)

岡・谷垣 はあじやないでしょ。

加藤 もう捨てたい。

岡・谷垣 だめです。もつたいない。

加藤 でも上手に捨てないときつと叱られたりするんだよ。きつとこれ。

岡・谷垣 叱られないように上手に使いなさい。

加藤 上手に捨てるか……

岡・谷垣 捨てるな。使え。

加藤 こんなのはぼつかりだ。

問。

岡 もしかしたらそういうことかな。

谷垣 なにが。

岡 ご褒美旅行にこんな宿つてつまりさ。社長は加藤君の不思議な悩み癖をよく知つてて、つまりこんなひなびた人里はなれた臭くて古くてぼろくて人が寄つてこなくてむさくて暑くて寒くて

谷垣 いいからはい。

岡 ほおりこんでおけば上手に捨て場所を見つけてくるだろうと。

谷垣 え。

岡 だつて。

谷垣 はい。

岡 見つからないでしょ。こんなひなびた人里はなれた臭くて古くてぼろくて人が寄つてこなくてむさくて暑くて寒くて、

谷垣 だからいいつて。

岡 ね。

谷垣 そんなのだめだよ。絶対だめ。使う。くやしい。

岡 そりやそうだよ。

加藤 もういやんなつた。決めて。

谷垣 なにを。

加藤 僕もう自分ではどうしたらいいのかよくわかんなくなつちやつた。

谷垣 決めるつてなにを？

加藤 僕のことどうしたらいいか、でこのお金どうしたらいいか。

谷垣 私たち二人で？

加藤 僕の服どうしたらいいか、僕の携帯どのへんで発見されることにしたらいいか、僕の胴体どこに埋めたらいいか、でこの金、この金融機関にとりあえず預けたいらいいのか、

谷垣 えちよつと待つてちよつと待つて。
加藤 スイスだね。スイスがいいよ。スイスの銀行はね。とにかくどんな金だつて秘密厳守してくれるつていうからね。ナチスドイツの強制収容所でユダヤ人の金齒引っこ抜いて作った金塊だつていまだに預かつてるつて噂だからね。

谷垣 ちよつと待つて待つてよ。

加藤 はい。

谷垣 それ今「僕を殺してください」つて言つてるようにしか聞こえないんだけど。

加藤 言つてるんです。

谷垣 ありやりやりやりやりやりやりやりやりやりやりやりやりやり

岡 うるさいつて。(と谷垣をたたく)

谷垣 ……りやりやりやりやり

岡 ……(谷垣をたたく)

問。

谷垣 (立つ)

岡 ン？

谷垣 ちよつと。

岡 ちよつとなに？

谷垣 うんこ。びっくりしたらウンコしたくなくなった。

岡 ウンコつていうな。

谷垣 じゃくそ。

岡 くそつていうな。

谷垣 ババ。

岡 さつさと行け。

加藤 ……ごめんな。

加藤 鉄砲？

谷垣 「これ実弾入ってますから。お仲間が撃たれることになりませんか。」

加藤 ええ。うそ。

岡、廊下のほうへ退場。あわてて。

加藤 えちよつと。岡さん。

谷垣 (部屋の中に入ってきて、座り) うんこでできなかつた。びっくりした。

加藤 岡さんあれなにに行ったの。

谷垣 びっくりするとウンコってひっこむんだね。初めて知った。

加藤 人質ってなんのために。なにが目的。

谷垣 いやよくわかんない。

加藤 わかんないってなに。

谷垣 聞いても答えてくれないんだもん。すぐ構えるし。

加藤 構えるって。

谷垣 こっちに向かって銃構えるんだよ。

加藤 撃つぞって？

谷垣 実弾の入ってる銃なんか向けられたことないでしょ。こわいよ？実際向けられたらね。おもちゃじゃないんだから。迫力あるんだから。ウンコひっこむよ？

私じゃなくてもね。絶対引つ込む加藤君のだから。

加藤 いやウンコの話はいんだけど。

谷垣 私のウンコだけじゃない！

加藤 だからウンコはわかつたから！

岡、戻ってくる。しゃがむ。

加藤 岡さん？

岡 銃向けられた。

加藤 へ？

岡 すいませせん。お湯がほしいんですけど、って言った

ら銃向けられた。

加藤 どこで。

岡 食堂。七人がちっちゃいテーブル囲んで座ってた。

加藤 ええ？だいたいどうして銃なんかもってるの。

岡 うちのおじいちゃんなんか持ってたよ。

加藤 そうなの。

岡 田舎の人はね。今でもウサギとか取ってきて自分で

さばいたりするから。

加藤 この宿だったらさばきそうだよ。牛肉ですよ。ってうそ言ってる客に出しそ。

岡 うん。

問。

加藤 ええー！

岡 うん。

加藤 なにそれえー！

谷垣 うるさいよ加藤君。(たたく)

問。

谷垣 なんだろう。

加藤 そりゃなんかお金がほしいんじゃないかな。

谷垣 そうかな。

加藤 そうでしょ。こんな旅館、儲かるわけないし。不況だし。客来ないし。川魚池臭いし。いちご赤くてし

わしわですっばいし。

谷垣 それは関係ないでしょ。

加藤 身代金を手に入れて、借金を払いたいんだよ。

岡 違うよ。高飛びしたいんじゃないかな。旅館に一度

は泊まりたい。

加藤 えなにそれ。

岡 自分で旅館やつてるとき。たまには人のやつてる旅館に泊まりたいと思っと思っ。

加藤 旅館に泊まりたいから高飛びするの？

岡 この一家にとつてそこがかなり重要だったりして。あげくのはてに別天地で生活をやり直したい。

加藤 じゃお金もつていこう。これあげよう。

岡 もつたない！

加藤 もつたないないって！

谷垣 あのね。

加藤 はい。

谷垣 部屋から出ないでって言われなかつた？

岡 言われた。

谷垣 部屋から出たら順番に殺しますから、って。

岡 うん。言われた。

谷垣 だから出ちゃだめだよ。

加藤 でもこの場合は別でしょ。お金が目的だったらあげるって言ったら。

谷垣 でもお金が目的じゃなかつたらどうする？

加藤 お金じゃない目的って。

谷垣 国家権力に物申したい。

加藤 国家権力。

谷垣 国の無策が不況を生んだのだ。そして世のたみくさは苦しんでいる。

岡 テレビカメラ呼ぶんだね。

谷垣 昔そういう在日朝鮮人の人がいたよ。温泉宿でお客様と経営者一家を人質にとつて。朝鮮人差別を許さない。テレビカメラの前で演説して左翼の英雄。

岡 世の中の人に訴えるんだね。

加藤 選挙に出たらいいじゃない。

谷垣 非法だからこそインパクトがあるんでしょ。こういうのは。ついでにイラク派兵反対とか言ってくれ。

小泉内閣打倒！

谷垣・岡 小泉内閣打倒！

加藤 ちよつときみたち盛り上がりつつある場合じゃないでしょ。

岡 変な宗教にはまってるさ。

谷垣 え。誰。
岡 このご主人がさ。
谷垣 えはいはい。
岡 で家族みんなも強要されて、いつの間にかはまってさ。
谷垣 うんうん。
岡 今日はその教義の上で大変重要な戒めの日に当たっている。さんげをする日。さんげをしたら幸せに彼岸に行けます。
加藤 彼岸。
岡 あの世だね。
加藤 そうなの。
岡 極楽往生ができます。
加藤 したらいいじゃん。それは勝手に。
岡 私たちにも救いを与えたい。
加藤 いやそれはまだどうして。
岡 さんげの日に隣り合わせになった隣人にお助けを授けるのは信者の務め。
加藤 それはわがままな務めだな。
谷垣 違うよ。教祖が捕まったんだよ。なにか白い服着て道を覆え、とかいうもんだから。
加藤 どこかであったような話だな。
谷垣 教祖奪還！刑務所から解放せよ。さもないと人質を殺すぞ！小泉内閣打倒！
谷垣・岡 小泉内閣打倒！
加藤 だからどうして盛り上がるのさ。
谷垣 だって小泉内閣はいかんよ。
岡 関係ないだろ。
谷垣 じぶんでつつこむなよ。
谷垣・岡 ぎゃはははは。
加藤 単に一家心中じゃないかな。
岡 うん。なに。
加藤 一家心中しようとしてたんじゃないかな。その日にたまたま僕らが泊まってしまつて。僕らが幸せそう

に見えていらいらした。
岡 うん。ご褒美旅行だつて話したもんね。
加藤 いらいらして、目につくもの全て殺そうとするんだよ。
岡 じゃまずこの虫殺せ。ふん！（手づかみ）ふん！
谷垣 じやいいじゃん。加藤君殺してもらつたら。
加藤 ああでも。いざとなつたらこわい。
岡 なんじゃそれ。
問。
加藤 お金もつていこうよ。とりあえず。
岡 あ。
谷垣 ちよつと。
加藤、退場。
問。
銃声が一発聞こえて。
問。
岡 うそ。
谷垣 簡単だな。
問。
加藤が戻ってくる。かばんを抱えて。
岡 あれ。
谷垣 戻ってきた。
加藤 撃たれたー！
岡 どこを？
加藤 ニニ。ニニ。ニニ。ニニ。（からだのあちこちを）
谷垣・岡 （加藤の身体を点検する）
谷垣 （加藤をたたく）どこも撃たれてないじゃん。
加藤 でも撃たれたんだよお。どーんつて。ばーんつて。

うひゃあーつて。
岡 なんだか陽気に撃たれるね加藤君は。夏祭りみたいだね。
加藤 撃たれてみろよ！怖いから！誰だつて陽気にもなるさ！
谷垣 私はならないなきつと。
加藤 どーん！ばーん！うひゃあー！
岡 お金じゃないんだね。
加藤 お金じゃないんだよ。俺見せたもん。見せたたんぱーん！どーん！チューイン！コーン！
谷垣 （たたく）うるさいつて。
岡 なんかプライド傷つけたんだろうか。そうだろうね。
谷垣 そんな下世話な理由ではないのだ！私たちは神につかえる身！
加藤 いや新興宗教って決まったわけじゃないんだよ？
谷垣 （たたく）おまえ声でかいつて。
岡 話し合いつてわけにはいかないんだね。
問。
加藤 逃げよう？
谷垣 どうやつて。こつち崖だよ。三十メートルは滑落するよ。
加藤 だからこつち。（逆をさす）
岡 こつちだつてじめじめの斜面だよ。道のあるところまで結構急だよ。靴だつて玄関だし、ないし。
加藤 いちごだつて生えてるし。
谷垣 関係ないでしょ。
加藤 電話。
岡 圏外。
加藤 屋根に上ろう。助けを求めて黄色い旗をふろう。
谷垣 周りに人家がないのに誰が見てくれるの。
岡 どうして旗は黄色なの。
加藤 幸せになりたいから。

岡 高倉健呼んでこい。
加藤 もう崖から飛び降りる！
岡 怪我するって。
谷垣 怪我じゃすまないよ。骨何箇所も折って、動けなくなつて、凍死だよ。冬空に。誰にも発見されないで、十三年後に通りかかったハイカーが白い骨を発見する。
岡 十三年後っていうのがリアルですねお姉さん。
加藤 変装して逃げる。
岡 なにに。
加藤 豆腐屋に。
谷垣・岡 おかしいでしょ。
谷垣 どうして。豆腐屋さんがいつ来たのよ。
加藤 三人で豆腐屋？
加藤 ねこになる。
岡 にゃあー。
谷垣 見える見える。
加藤 一人だけ人質残すから、病人は解放してくれ。
岡 病人は誰？
加藤 俺俺。
谷垣 加藤君ってそういうやつだったんだね。
加藤 うそうそ。ごめんささい。怒らないで。
岡 でもそうやって解放された人が警察に走るんだよ。
谷垣 一人でも減つたら殺す、っていうんだよ。そんなの許すわけないでしょ。
岡 うひー。
加藤 ー！
岡 問。
加藤 どもぢ。
岡 ……
加藤 生き生きしてるな。僕。今。

岡 え。そうかな。
加藤 うん。生き生きしてる。いやあ。必死だな。僕。今。すごいねこれ。今。
谷垣 そりやだつて助かりたいと思うから。
加藤 実感つてこれだよな。生きてるって実感だよな。これがさ。
谷垣 なにをブンガクテキになつて。
加藤 もしかして僕らは今監禁されていないのかもしれない。ただ、ここにいて。ここにいて。どきどきしてる。カウンターの影できゅって手握られてもドキドキしなかった男がこんなにドキドキしてる。
岡 かわいいそうな男だ。
谷垣 監禁されてほつとしてるのよ。
岡 なにそれ。どういうこと？
谷垣 外の世界はしんどいから。監禁されたら、なにもできないでしょ。できないんですって言い訳ができる。
加藤 そんなこと思つてないよ。
谷垣 雨の日は好き。
岡 なに。
谷垣 小さいとき。外で元氣よく遊べないから。晴れた日は外で皆と笑わないといけない。でも雨の日は自由だ。監禁は自由だ。
岡 うん。……あ。
加藤 うん。……あ。
岡 なに。
加藤 ちめたい。
岡 どうした？
加藤 あれ。(天井を見る)
岡 雨漏りだね。
加藤 雨漏りつてなに。
岡 屋根が古いとね、雨が降つたら天井から水が落ちて来るんだよ。
谷垣 国語辞典か。なに説明してるの。
岡 いやだつて現代の若者は体験してないよきつと雨漏

りなんか。
谷垣 ていうかいつの間にか雨降つてたんだね。
加藤 ……(天井を見上げてる)
谷垣 あちめたい。
加藤 (かばんを探しにいく。傘を取り出し、さす)
岡 うわ。用意がいいね。
加藤 まさか部屋の中で使うことになるとは。
谷垣 私持つて来てないよ。
岡 私も。
加藤 入つて入つて。
岡 すいません。
谷垣 ああ。私も。
岡 はりあうなつて。
谷垣 はりあつてるとかじゃなくて。
加藤 しつ。静かに。
谷垣 どうして？
加藤 ……仲良しの子供みたいだね。僕たちは。
谷垣 うん。
岡 ……
加藤 僕たちは小さい子供だったら、よかつたね。
谷垣 なに？
岡 どういうこと？
加藤 三人で結婚するのにね。
谷垣 加藤君は結婚してるじゃない。
加藤 いやかまわないうつて言つたらかまわないうつてな。さす。
岡 そりやそうか。
加藤 結婚つていうのは、なんか好き、とか、チュウ、とかのすく盛り上がった状態くらいにしか思つてなかつた。だからいいんだよ。
岡 ……うん。
岡 問。

谷垣 私やだ。

岡 え。

谷垣 私は子供じゃない。私はあなたを愛している。でも子供じゃないから一対一になりたい！

加藤 え。うん。

谷垣 (立って) 不倫はいやだ。別れるって言うてくれた！別れて！

加藤 谷垣さん、ぬれるよ。

岡 (立って) そんなの私も同じでしょ！わがまま勝手なこと言わないで！

加藤 ぬれるって。おちかかさん。

岡 どうして？どうしてこんななの？

谷垣 こんなってなに。

岡 私ね。きつときみしいと思う。

加藤 え。なにが。

岡 たにがーと取り合ってるのはしんどい。しんどいけれど、それがその夢中になって張り合ってるのが私ってことになっちゃった。生きがい。なにそれ？どうなってるの？

谷垣 うん。

岡 今だって私、加藤君と一緒に死ねるのは私のほう、なんて思ってる。

加藤 え。いや僕は今はそんなことは。

岡 錯覚だって知ってるよ。加藤君自体に魅力があるなんて思わない。こんな優柔不断な二股男。でもね。もう今はそうなんだよ。

谷垣 いいじゃんそれで。

岡 よくない。

谷垣 がんばろうよ。おちかかが必死になにかを目指してしてくれた方が私、いい。

岡 そんなの勝手にやります。

谷垣 白けちゃだめだよ。私もがんばれるじゃん。気持ちいいにき。だいたい社長になったから、つてどうなんだろう、そんなの実際なってみたらハッピーな

ことなんだろうか、なんてね、考えちゃだめだよ。私誰に勝つたらしいの。

加藤 いやでも今そんなこと話している場合じゃないとか、(思いませんっ)

岡 勝つてどうするのよ。

谷垣 勝つてことに意味があるのよ。

岡 勝ち続けたら最後相手いなくなるよ？きりないんだよ？

谷垣 そんなこと考えちゃだめ。

岡 考えちゃうでしょ。

谷垣 考えないようにするんだよ。

加藤 雨漏りする家でさ。

岡 なに。

加藤 ニコニコしてられたらいいよね。

谷垣 なによそれ。

加藤 いつまでもじっとして、ニコニコしていられたらいい。

岡 無理だよ。

加藤 知ってるよ。今までずっと無理だった。

谷垣 うん。

加藤 他人を好きになることも、生きがいのある仕事を手に入れることも。幸せみたいな感じを手に入れることも。人生って言うのはそこにあるいちごみたいなもんだよ。意味なく、目立たない。それで終わるんだよ。

岡。

谷垣、かばんを取り出して、中から服を投げる。岡に。

谷垣 投げ返して！

加藤 え。なに。

谷垣 そうかもしれないけど、確かにそうかもしれないけど。いらいらする！どうしようもないくらいいらいらする！ほら！投げ返せ！投げ返してこい！(投げ返す)

岡 (反射的に投げ返す)

谷垣 やったなあ！(投げ返す)

岡 ちよつと待つてちよつと待つて。

谷垣 はい。

岡 枕投げ？これなに？

谷垣 いちごでもいい。でもいちごだってね。ちよつとでもきれいに実りたいって思うんだよきつと。私もね。ちよつとでもきれいにしたいと思う。だからやる。いく。

谷垣、無茶苦茶に服を投げまくる。そして止まる。

谷垣 愛しているわ！

岡 え。うん。

加藤 ……なにを。

谷垣 国道のむこうにはね、海があると聞いていた。この道の先には幸せがある、って思ってた。昔。学生の時。輝くような道がね、ある。あった。でしょ。一緒に男の子のバイクの後ろに乗っけてもらって、走ったよね。実際、海まで行ったもんね。

岡 山田君の後ろはいつもたにがーに取られて。

谷垣 とったけど。

岡 思い出してもむかつく。

谷垣 それは私たちの心にあつたんだと思う。心にあつたんだから、今からだつて見つかるとね。きつとね。みつかると。

岡 うん。そうかな。

谷垣 私、行ってくる。銃、おろしなさいって話してく

谷垣、去る。岡。

銃声一発。「うあー」と谷垣の声。

岡。

